
聖と魔と俺の異世界譚～外伝～

岡 竜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖と魔と俺の異世界譚／外伝／

【Nコード】

N1542Q

【作者名】

岡 竜矢

【あらすじ】

作者が絶賛更新中(?)の聖と魔と俺の異世界譚の外伝小説です。主に一話完結の短編ものを多くする予定ですが……ま、この先どうなるかは作者にも分かりません(おい

1、笑いに泣きに絡みにえとせとら

さて、どこから説明しようか。

「マコトしゃん！ 私のはなひ聞いひえましゅか？」

「あはははっ！ ホントにルクセリアは可愛いわぁ」

「貴様ぁ！ オレの酒が飲めんというのかぁ！」

「うう、我が娘は一体何時になったら身を固めてくれるのだ」

「はっは、まあボルゼよ。今は飲んで嫌なことは忘れんかい」

「そうですねぁ！ 今日は無礼講といきましょう！」

「飲み過ぎは、後日の公務に支障をきたします。皆様方、程々に控えて下さい」

うん、これはもう説明うんぬんじゃあないな。

「もう、マコトしゃんもにやにか喋ったらどうれすかぁ！？」

「そうだそうだぁ♪ あはははははははっ♪」

「は、ははっ……」

もはや乾いた笑いしか出ない。

ああもうホントに……

どうしてこんなことになった？

「およそ5時間前」

俺はセリアと一緒に城内の庭園を散歩していた。

絵画などでしか見たことがない、厳かな雰囲気を感じさせられる庭園だ。

そして、

「マコトさん。早く来てください」

その庭園にセリアが立つと、一つの絵が完成したように思えた。

若干、俺はその美しさに惚けていた。
すると、

「マコトさん？」

「おうわっ!？」

いつの間にかセリアが俺の目の前にいた。

セリアは不思議そうに俺を見つめ、

「どうしたんですか？」

「いや、あの、その、ええと……」

さて、どう言ったらいいものか。

ケース1

「セリアが綺麗過ぎて見惚れてたんだよ、はははっ」

いや、これはさすがに直球過ぎるだろう。

ってか、恥ずかしい。

言ったら気まづくなるのは確定だ。

ケース2

「いや、ちょっと考え事してたんだよ」

無難だが、リスクが大きい。

万が一、どんなこと考えていたのかと訊かれると確実に詰まる。
これは保留。

ケース3

「いやあ、ちょっとあれが何か気になってさ」

これだ！

この庭園にある植物は、俺が知らないものばかり。
つまり、適当なもんを指して「あれ何？」的なことを訊けばいい
だけだ。

という訳で、すぐさま目に映った一本の木を指し、

「いやさ、あの木が何か気になったんだよ」

「木……ですか？」

セリアの視線が、俺が指した木に向けられる。

その木は庭園の中心にあり、緑色の葉ではなく、まるで桜のように小さな花々を咲かせていた。

「あれはルルフの木です。とても珍しい木で、この時期になると青色の花を咲かせるんですよ」

「へえ、まるで桜みたいだな」

「っ？ さくら？」

セリアが首を傾げる。

「ルルフと似たような木だよ。ただし、花の色は淡紅色や白色だけだな。それで、俺のいた世界……じゃねえな、俺の住んでいた国では、桜が咲く時期になると花見をするんだよ」

「はなみ？」

また訳の分からない単語が出てきたと思ったのだろう。再びセリアが首を傾げた。

「そんなに難しいもんじゃない。ただ木の下で花を見ながら、みんなでなんか食ったり飲んだりしてはしゃぐだけだよ」

「木の下で……ですか？」

「ああ。ま、花見にも色々あるけど、基本は木の下だ。まあ、綺麗なものを見て酒飲んでどんちゃん騒いで、日頃の憂さやら鬱憤やらを解消するんだ」

と、俺がセリアに自分の持っている花見像を説明していると、

「あら、それって昼間からやってもいいの？」

「ああ、もちろん」

「ふうん、ちょっと面白そうね」

「だろ？　なんだかんだで、俺もよく家族と――」

数秒間、思考がフリーズした。

何故か、俺の話し相手がセリアからアクアに代わっている。

そのセリアと言えば、アクアに抱き付かれ、身動きが取れなくなっている。

「あんた、どこから湧いて出た!？」

「細かいことは気にしない気にしない♪」

「細かくねえだろ!？」

「まあ、そんなことは置いといて」

「置くな!」

「花見、だっけ？　それ、しましよ♪」

.....

.....

.....

「はい？」

「だ、か、ら、花見。面白そうだからしましよ♪」

ああ、そうだ。全てはこの一言から始まったのだ。

く現在く

「あのセリアさん？」

「んん？ にゃんですかあゝ？」

「そこまで引っ付かれると、ものすごく飲み辛いんですが」

あと理性が持ちません。

今の俺の状態を説明すると、セリアが腕にぴったりとくつついている。

そう、ぴったりと、だ。

つまり、

「らってゝこうしないとマコトちゃん、私から逃げちゃうじゃないですかあ」

彼女の胸が常時俺の腕に当たり続けているという訳で、

「ほらゝまた目を逸らひまひたあ！」

こう、年頃の男としては、この柔らかい何かの感触がとても堪える訳でして、

「ゝゝっ？ マコトちゃん、顔が真っ赤ですよお？」

もはや理性の限界に近い訳です、はい。

（くっ、誰か助け舟を出してくれる奴はいないのか！？）

俺は急ぎ、辺りを見回す。

最初に目に入っただのは、

「おい、貴様あ！ ルクセリア様にそれ以上引っ付くな！ というか、俺の酒をとっとと飲め！」

目が合うとひたすら絡んでくる竜人。

確実に状況が悪化する。却下。

次に視界に入っただのは、

「うふふ、ルクセリアが飲んだお酒………ぷはあ、か・く・べ・
っ♪ あははははっ」

変態……もとい、ひたすら楽しんでいるじゃじゃ馬姫。

てか、もうこいつは頭を冷やすべきだと思う。

無論、助けを請おうとは思わない。というより、今のあれに助けを請うたらセリアが危ない。（色々な意味で）

くっ、まともな奴がいない。というかこの場にまともな奴がいるのかも怪しくなってきた。

他にはもういないのか！？

「ううう、どうしてあんな娘に育ってしまったのだ」

痛ましくて見てられない！

「がははは！ ま、ああなっちゃんもう手遅れじゃい」

心の傷を広げるな！

『がーごー』

もう酔い潰れてる！？

「うう、エルフィード將軍、どうしてあのようなことを……」

「言うな！ 我々、一兵士にはどうすることもできなかったのだ」

「ですが隊長！」

「今日は飲め！ きっと將軍もこの場に居られたらそう言うはずだ！」

『はい！』

………なんだろう、心がすごく痛い。

だ、駄目だ。いない。

もう限界も近い。理性を総動員してもこれ以上は持ちそうにない。

そんなときだ。俺の視界に一人の男が入った。

「姫様、そのようなはしたない行為はおやめください」

「別にいいじゃない。今日は無礼講よ、ぶれいこー♪」

ベルモット・オースティン。近衛師団の長にして、ターミ●ータ
ーを髣髴させる言動と風格の持ち主。そして、この場で（俺を除い
て）唯一理性を保っている人物だ。

俺は急いで彼に助けを求める。

「ベルモットさ——」

「だからほら♪ ベルモットももっと飲みなさいよ♪」

「姫様？ 何をうぐ……………」

「あれ〜？ ベルモット〜？ あははははっ、もう酔い潰れちゃった♪」

絶望とは、きっと今の俺の状況をいうのだと思う。

そして、最後の希望が無残にも絶たれたのと同時に、

「マコトしゃ〜ん」

「っ!?!?!」

突如、セリアが更に身体を密着させてきた。

あ、これ、もう駄目。

俺の中で何かが切れた。

「セリア！ 俺もう——」

「すー」

「……………へっ？」

……………え〜と。

「むにゃ…………すう」

「寝て…………らっしゃる？」

いや、まあ、あれだけ飲んでたからな。酔い潰れても不思議では

ないか。

しかしなんだ、よかったような残念だったような……あ、言っとくが俺は寝込みを襲うような外道な真似は絶対にしないからな。

気が付けば、その場にいたほとんどの者がセリア同様、酔い潰れていた。

「すう……くしゅんっ……」

「と、このまま寝たら風邪引くな」

俺はこんなこともあろうかと、侍従の方々に頼んで用意してもらい、なおかつ近くに置いておいた人数分の毛布を一枚取ると、セリアにそっと掛けた。

え？ 他の奴にはって？

そんなん知るか。

ま、なんだかんだで無茶苦茶なことになったが、

「やっぱいいな、こういうの」

こうやって、みんなではしゃぐのは悪くない。

（翌日）

「うう、頭がガンガンします」

「る、ルクセリア様……大丈夫……ですか？」

「あう、すごい頭痛いわ。誰かゝ水ゝ」

「むう、これはさすがにきついぞ」

「さすがに……飲み過ぎたか……」

「我々も……少し体調が……」

「ですから、飲み過ぎは公務支障をきたすと言ったのです」

「な、なんでベルモット団長……平気なんだ？」

「し、知るか」

訂正、やっぱ昨日ははしやぎ過ぎた。

1、笑いに泣きに絡みにえとせとら（後書き）

酒は飲んでも飲まれるな。

はい、初めての方は初めまして、それ以外の方はこんにちは、な作者です。

さて、外伝一話です。ぶっちゃけ、本編読まないと分からんことだらけですが、それはそのうちこちらでも補完する予定です。まあ、広い心と適当な感じで読んでくださればと思います。

初っ端、長い話もあれなので今回はここまで、とさせていただきます。

……あ、分からないことあれば、感想送ってください。確実にお受けしたい考えです。そして、それ以外でも感想その他待っています。

2、モンスターハント。略して（以下自粛）

それは、爽やかな日差しが照りつける朝のこと。

「魔物退治い〜？」

「なによ。そのすぐめんどくさそうな返事は」

なぜか不機嫌なアクアに対し、俺は率直かつ訊いて当然であろう問いを投げかける。

「なんで俺にそんなこと頼むんだよ」

「あら、あなただけじゃないわ。ワイツも一緒よ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

魔物の退治ならば、本来、国を守る兵が行うべきものだ。

アリエスにもちゃんと自衛のための軍があるのだから、それを動かせばいいだけだと思うのだが。

と、アクアが突然、窓の外に視線を移し、

「ねえ、知ってる？ 最近うちの兵たちが疲労で倒れることが続いているの」

「あ、それ聞いた」

確か仲良くなった侍従の子から聞いた話だと、ある日を境に全体のおよそ8割の兵たちが毎日ボロ雑巾のような姿で修練場から帰ってくるようになったらしい。

まあ、国を守るために訓練に励むのは良いことだとは思う。だが、

さすがにボロボロになるまでする必要はないだろう。しかも、それが原因で緊急時に対応できなければ本末転倒だ。

と、なぜか突然アクアが俺の頭を両手でがっしり押さえ込み、

「じゃあ、その原因がどこかの体力馬鹿の竜人っていうのは知ってるかしらあ？」

「は、初耳です」

「ふふ、おかげでこっちは必要最低限の兵しか動かせず、魔物の退治まで手が回らなくなってるんですけどね〜！」

アクアさん、頭が痛いです。物理的に。

ついでに顔も怖い。もはや表現できない怖さになってます。

って、待てよ？ それって、

「俺のせいじゃなくって、ワイツの——」

「ねえ、突然だけど連帯責任って、とても素敵な響きだと思わない？」

「今の俺にとっては、一番聞きたくない響きです」

「ふふ、ごちゃごちゃ言わずに……」

アクアの両手にさらに力が入る。

「さっさと行ってこい♪」

「……………はい」

時として、人は脅しに屈しなければならない時がある。（主に生命の危機的な時に）

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

今日は、とても天気の良い日だ。

こういう日のことを、ピクニック日和とかデート日和とかと言うのだろう。

そんな爽やかな天気の日に、

「なんで野郎と二人っきりで出かけなけりゃいけないんだ」
「黙れ、それはこっちのセリフだ」

俺とワイツは、お互いを罵り合いながら、街道を進んでいた。

ちなみに今回の移動は、馬を使っている。

なんでも例の魔物は、アリエスとその西部に位置する商業都市を結ぶこの街道を中心に出没しているらしい。そのため、徒歩では時間が掛かるため、馬で行ってさっさと解決してこいとのこと。

未だに人的被害は出ていないが、アクア曰く、それも時間の問題だそうだ。

また、被害に遭うのが行商人ばかりのため、西部との物流が滞っているのも問題となっている。

「くそ、ルクセリア様からの命がなければ、誰がこんなことをするか」

「お前、こうなった原因が自分にあること自覚してんのか？」

「ふん、あの程度で倒れる奴らが悪い」

うわ、言い訳が完全に加害者のそれだ。

つか、まったく反省してないな、こいつ。……帰ったら一度、セリアに叱ってもらおう。

それから、さらに移動すること数時間。

「……妙だな」

ワイツが訝しげに周囲を見渡す。まるで、何かを探すように。

「何やってんだ？」

「馬鹿が、もうここは魔物が出現する場所だぞ」

「みたいだな。で、何が妙なんだ？」

「少しは考えろ。襲われた奴らは、馬車や荷物を全て捨てて生き延びているんだぞ」

ああ、なるほど。

つまりは、

「ここら一帯には、襲われたはずの馬車とかの残骸がない」
「そういうことだ」

確かに不思議なことだ。

では、それらの残骸はどこへ行ったのだろうか？ 魔物が綺麗に後片付けした……なんてことはないか。

「……おい、何か聞こえないか？」
「んっ？」

ワイツの言葉を聞き、俺は馬を止め、耳を澄ます。

あ、確かにどこからか、ゴゴゴッ、と地鳴りのような音が聞こえてくる。しかし、周囲にはその音源と思われるものはない。

それにこの音、なんかどんどん大きくなってきているような？

すると、

「——っ！ まずい、走れ！」
「何を——」

突然、何かに気付いたワイツが叫び、馬を走らせる。

それとほぼ同時に、地面からゴポッという音が鳴る。

直後、

「な……」

俺は絶句する。
なぜなら、

「なんじゃこりゃあああああああ!？」

半透明のゲル状の液体が地面から大量に噴出してきたからだ。

走る。死ぬ気で走る。脇腹が痛くても走り続ける。

もちろん自分の足で、だ。馬ではない。馬ならついさっき“食われた”。

だから、俺たちは現在進行形で走っている。……いや、まあ正確には「逃げている」と言った方が正しいんだが。

「なにあれ!？ なにあれ!？ なんだあれ!？」

「スライムだ。魔物の中じゃかなり厄介な部類に入る。なるほど、残骸が見当たらなかったのは、あれが食ったからか」

「冷静に分析すんな! ってか、スライム!？ あれが!？」

一度振り返り、俺たちを執拗に追ってくる緑色のゲル状の液体の塊を見る。全体の大きさは、大体家三件分ぐらい。

続いて、俺の脳内にあるスライム像を比較する。

結果、

「あれはスライムじゃない!」

とりあえず現実を否定した。

嫌だ！ あれは名前を付けるなら“ゲル状液体A”だ。あんなのがスライムであってたまるか！

「あれが「ボク、悪いスライムじゃないよ」なんて言っても、俺は絶対仲間なんかにしないぞ！」

「……お前はさっきから何を言っているんだ？」

「気にすんな！ それより、あれどうやったら倒せるんだ！？」

「簡単だ。どこかにある核を壊せばいい。そうすれば、一気に死滅する」

なるほど、確かに簡単だ。

しかし、

「その核ってどこにある！？」

「あの気持ち悪い液体のどこかだな。ちなみに大きさはこの位だ」

言うところ、ワイツは握り拳を見せる。

「で、どうやって壊すんだ？」

「魔術での遠距離破壊しかないな。無闇に飛び込めば、足搔く間もなく食われるぞ」

「んなことあ分かってるよ！」

俺は叫ぶと、すぐさま無詠唱で出現させた数十発の炎の塊を、一斉にゲル状液体A（仮）向かって放つ。

炎の塊がゲル状液体A（仮）にぶつかり、爆炎を撒き散らす。

「って、全然効いてねえ!？」

「馬鹿か！ 表面だけ吹き飛ばしても意味が無いだろうが！ 全体を大火力で攻撃しろ！」

「うっせえ！ じゃあこれならどうだ！ 雷の民よ、汝、天より降り注ぐ地を貫く槍と成れ！」

空から幾筋の巨大な雷がゲル状液体A（仮）に直撃する。

先程の爆炎が線香花火に見えるほどの爆発が起きる。その直後、鼓膜が破れるかと思うほどの轟音と衝撃が飛んできた。

「~~~~っ！ ど、どうだこの野郎！」

耳の中が未だキンキン鳴っているが、俺はゲル状液体A（仮）がいた跡地に向かってガッツポーズをやった。

そこには、ゲル状液体の姿は無く、ただただ巨大なクレーターが存在するだけだった。少しばかりやり過ぎたかとも思ったが、まあ、無事に倒せたのだから万事OKだろ。

とりあえず、どんなもんだとワイツの方を見ると、

「やり過ぎだ！ この馬鹿が！」

なぜか、ものすごい形相で怒っていた。

「誰がここまでしろうと思った！ 貴様は手加減というものの知らんのか！」

「んだよ、それ！ 威力上げろって言ったのはそっちだろうが！
つうか、お前に手加減云々言われたくねえ！」

「誰も相手を消滅させろとは言ってない！ 動きを止める程度でよ
かったんだ！」

「じゃあ最初からそう言えよ！」

「言わんでも分かるだろうが！」

「分かるか！ 現代っ子舐めんなよ！」

「また訳の分からんことを！ 大体、貴様は——っ！」

「はあ！？ なんだ、そう言うお前だって——っ！」

+++++

（数日後）

「お帰り。意外と遅かったわね」

魔物の討伐に行かせてからおよそ三日後、ようやくマコトとワイ
ツが帰ってきた。

しかし、余程手強い魔物だったのだろうか？ 二人とも、身体中
ボロボロだ。

アリエス周辺は、魔物の出現は多くなく、強くてもこの二人なら
腕一本で倒せるほどの奴しかないはずなのだが……。

「あんたたちがそこまで苦勞した魔物が出るようになってるんなら、
見張りを増やしたり、国民に注意を促したりしないといけないわね」

と、マコトがあたしに向かって何かを訴えている。なぜか口パクで。

「えっ、なに？　ちゃんと喋りなさいよ」

「————っ！」

「……はっ？」

違った。マコトは喋っていたのだ。ものすごく小さな声で。

それで、しっかり話を聞いてみると、魔物は（どうやらスライムだったらしい）すぐに倒せたのだが、馬を食べられてしまい、仕方なく歩いて帰ってきたそうだ。

そして、

「……………馬鹿馬鹿しい」

その道中、ずっと喧嘩していたそうだ。

「————っ！」

「————っ！」

訂正、その喧嘩は未だに継続中らしい。

「てか、あんたら。相手が何を言ってるのか、よく分かるわね」

ホント、この二人は仲が良いのか悪いのか……。

ま、とりあえず、

「ルクセリアのところに行つてこよ♪」

面倒くさいので、放っておくことにした。

2、モンスターハント。略して（以下自粛）（後書き）

どうも、作者です。今回のお話は、

ゲル状液体A（スライム？）が現れた！

1ターン目

マコトの攻撃！ スライム？に100のダメージ。

ワイツは指示を出している。

スライム？は二人を追いかけている。

2ターン目

マコトの攻撃！ スライム？+地形の一部は消滅した。

マコトたちは勝った！

的なノリで読んでくれたら幸いです。

とりあえず、グダグダな感じがめっちゃします。

ですが、これだけは言いたいです！

ぶっちゃけ、主人公とワイツは最強クラス設定なので、そりゃ一瞬で終わりますって、ねえ？ と！

あゝ、あと作者のスライム象は、レベル99になるとマダ●テ覚えるアレです。でもさ、あれはレベル1でも村人Aより強いんだぜ！ レベルが上がれば合体するんだぜ！

でも、なぜクイーンがいないのか、それが作者の最大疑問なのです。（だって、メスいるじゃん！

それでは、また次回、よろしかったらお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1542q/>

聖と魔と俺の異世界譚～外伝～

2011年2月21日23時15分発行